2009年（平成21年）
第24号
（12月15日）

# 平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

## 教会発足５０周年事業実行委員長のお役をいただいて

宮地　啓安

１２月９日、教会発足５０周年布教推進プロジェクトの方々の打ち上げ反省会に参加し、昨年の夏以来１年半にわたる実行委員長のお役を完了させていただきました。この１年間、本当に会員の方々だけでなく、ご支援をいただきました多くの方々のおかげさまで、「教会発足５０周年」の１年間の事業を満了させていただいたことを改めて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

５０年前に京都教会をこのような教会にしようと想像したひとは誰一人としておられません。純粋に一つの教えを信じ、その教えを実践し、家庭・社会に教えを広げてこられた結果が今日を築き上げてこられたのだと、そのご努力に対する感謝の念に耐えません。

この１年間、京都教会の会員は「５０周年」だからと、様々な精進をしてきました。「『絆』づくりをするんですよ」というスローガンに基づき、一人ひとりとの出会いを大切にしてきました。

そのおかげで、５月には千人近い会員と共に、本部に参拝（団参）させていただくことができました。この団参により、各支部の会員同士の結束を高めていただくことができました。

そして、１１月１日には記念式典を開催させていただきました。当日、来賓の方々、会員を合わせ２千人近い人たちが、京都教会に集まりました。

その後、支部ごとに５０周年を迎えた感謝の確認と、１年間の精進の慰労を兼ねて「支部感謝の集い」が開催された。その集いを通じて来年５１年目はスタートの年、１００周年に向けてますますの精進を誓いあいました。

合掌

## 「ARMS　DOWN！共にすべてのいのちを守るための5000万人署名（世界）キャンペーン」

２００６年のＷＣＲＰ青年世界大会で採択された「広島宣言」の実現に向け、ＷＣＲＰ国際青年委員会（ＩＹＣ）を中心に各地域や国において、青年宗教者による様々な平和活動が行われてきた。そして年々増強される軍備、急速に深刻化する貧困や環境といった地球的規模の問題に対し、ＩＹＣは地球規模で取り組む青年の緊急行動として、本キャンペーンの実施を決定した。それをうけＷＣＲＰ日本青年部会は、加盟教団とともに、国内における「ARMS　DOWN！共にすべてのいのちを守るためのキャンペーン」活動を開始する。京都教会渉外部においても青年部の動きに合わせバックアップをしていくことになった。

■目的

・あらゆるネットワークを活用し、広く市民に呼びかけ、日本中でキャンペーンを実施することにより、軍縮と「共にすべてのいのちを守る」の精神を社会に広めていく。

・全国の青年部員がキャンペーン活動を通して、地球的課題に対し主体的に取り組むことにより、日本はもちろんのこと、世界全体の平和実現に資する人材になる。

■目標

国内１０００万人の軍縮署名（全世界で５０００万人）

## 時事刻々

今月の七日から十二日まで、中村教会長がコペンハーゲンに行った。近畿宗教者連盟の一員として、ＣＯＰ１５のプレゼンテーションで、京都から宗教者の立場で、地球温暖化防止をアピールするために渡欧した。

連日報道されたＣＯＰ１５のテレビ画面に、京都からの一行が映らないかと見ていた。ところが、全く一行の姿は放映されず、ややがっかりしている。

地球温暖化は避けたい、とはいえ自国の経済発展を妨げたくない、という考えから合意を出せないでいる姿を目にするにつれ、その国の傲慢さに怒りに近い感情を持つ人も多かろう。

そこに垣間見る、人間の持つ自己中心性は、ひとごとではない。その心がある限り、他を批難していいのかと反省したい。

**２００９年京都教会は発足５０周年を迎えます。私たちは『多くの方との“絆”をより深めよう』をテーマに修行精進します。**

## ダーナ創刊記念講演会（ひろさちや先生）

１１月１４日（土）、神戸市の松方記念ホールにて、佼成出版社が発行するダーナ創刊記念講演会が開催された。この「ダーナ」とはサンスクリット語で与えるや布施を意味し旦那の語源である。壮年は勿論のこと幅広く読んで頂きたい雑誌だ。

さて当日はひろさちや先生から「生活に生かす仏教の知恵」と題した講演をいただいた。ひろさちや先生は以前京都教会にも来られ大変ユニークでしかも誰にでも分かりやすいように仏さまの教えを説いていただいた。

今回は諸法実相をわかりやすく説かれた。まずお釈迦さまのある説法を引用された。長い間子供が授からなかった女性にやっと授かった子供が亡くなり、この子供が生き返る薬を欲しいとお釈迦さまに訴えかけると、お釈迦さまはその薬を与えようと条件付で仰られた。

その条件とは「薬の材料になる「からし種」を集めておいで、ただし死者の出したことのない家からもらってくるんだよ」と。母親は必死に探したが見つかない。この世に死者を出した事の無い家などないからだ。

多くの仏教学者は、母親はここで無常の教えを悟ったと言っている。しかし、ひろさちや先生は違う観点で、お釈迦さまはこの説法から諸法実相を説かれたのだと言われた。

生きている子供が良くて死んだ子供はダメなのか。生きている子供も死んだ子供は死んだままで最高なんではないか。生きている・死んでいるが善し悪しではなく生命の永遠を説き、死んだ子供もまたそのまま素晴らしい。

物事や人や現象はあるがままの姿で仏さまの目から見ると全てが○（まる）なのである。健康が良くて病気が悪いのか？不幸な健康な人もいれば幸せな病人もいる。今私たちは○か×かで物事を判断しているが、あるがままで幸せを探したいと思う。

そしてみんな一緒に「人生老死号」に乗って走っているんだ仏さまから「次ぎ降りなさい」と言われると周りの乗客に挨拶をしてから降りる降りないと次の人が座る席が空かない、降りることが布施でやはり死なないといけない。向かいのプラットホームには「ほとけ号」が迎えにきているはず。人生老死号に乗っている間は和顔愛語が大切だ。

大変ユニークで有意義な講演会だった。

## 山科明社バザー

１１月２２日（日）、大宅フラワーガーデンにて、山科明社が主催して、恒例の「ふれあいバザー」を開催された。天候の怪しい中ではあったが、終了まで雨に降られることなく、無事終えることができた。

また、毎回「ロータスアンサンブル」（おじさんバンド）に来ていただき、バンド演奏をしていただいているが、今回から山科地区の若手によるバンド演奏も加わり、よりいっそう活気のあるものとなった。

山科明社の古田雅章運営委員長は、「バザー商品販売、模擬店、野菜販売など地域の協力もあり、大成功に終わりました。細かい反省点もありますが、協力者、参加者のおかげさまを感じ、また来年に向けての活力をいただきました。」と、今後も継続して地域の明るい社会づくりに取り組むことを述べた。

今回は「諸宗教対話～開祖の願いをこの京都の地に～」をお休みとさせて頂きます。

## 他教団活動紹介　（中外日報１２月１０日より）

**●地道なボランティア活動を継承**

霊友会法友文庫点字図書館（川岸良行館長）が創立５０周年を迎えた６日、東京・麻布台の釈迦殿で記念の「感謝のつどい」が開かれた。これまで霊友会会員を中心としたボランティアが点訳・音訳などを続け、視覚障がい者の文化活動を支援してきた。この日は利用者やボランティア、支援団体や霊友会関係者らが長年続けられてきた活動に敬意を表した。

## 京都教会　あの日あの時　～最終回～

平成２年６月

開祖さまをお迎えして地鎮祭が行われた。その後、平和祈願石納め式、上棟式、定礎式、ご本尊ご安置式、入仏式が行われ平成６年３月に落慶式を迎えた。建物に恥じない我々でありたいです。

**５０年前（１９５９年）の出来事：年末恒例の「日本レコード大賞」第１回が開催されました。水原弘の「黒い花びら」が大賞を受賞。**

# 仏教を生活に生かす　《光をあてる・・・合掌》

**〈一切衆生悉有仏性〉生きとし生ける者にはみんな仏性があるんだと、お釈迦さまがハッキリおっしゃっているんですから、このことをしっかりと腹の中に入れておけば、常不軽菩薩品にあるように出会う人ごとに、〝ただ礼拝を行ず〟で、心から拝めるんです。**

庭野開祖が波木井山(はきいさん※)参拝の途中、近くの教会へ立ち寄られました。そこで、庭野開祖を囲んでご指導会が開かれることになり、一人の高校生担当の若い女性が手を挙げました。

「教会でお手伝いをしていて、小指にケガをしてしまいました。そのことをどう受け止めればよいでしょうか」そうお願いすると、庭野開祖はにっこりほほえんで、こう答えられたそうです。「あなたのように若い頃からご法精進していると、私の年になる頃は、仏さまだね」

この女性は、小指にケガをした原因を知ることで、自分を変えようとしました。けれども庭野開祖は、小さなことを通して自分の心を見つめようとする、純粋な心そのものの価値を教えて下さいました。

庭野開祖の言葉で、彼女はきっと自分のなかの仏さまにふれたことでしょう。「あれから、逆風に負けそうになることもありましたが、そのたびに庭野開祖のあの笑顔とお言葉を思い出し、精進させて頂いています」と話しています。

※波木井山＝身延山久遠寺を含む十三里四方を日蓮上人に寄進した波木井六郎実長を開基とする円実寺

**私どもが「おはようございます」「ご苦労さまです」「日々、有難うございます」と言葉をかわす時、お互いに合掌し合っておりますのも、だれもが内心に持っている仏性を完全に磨き出すためであります。**

庭野開祖は、出会うどなたにも、必ず合掌でご挨拶されました。ご家庭の中でお孫さんに対しても、合掌で拝まれました。庭野開祖の近くにいると、いつも前向きで、人を喜ばせたいという、自分の中のいちばん気持ちよい心が湧き上がってきました。

それは庭野開祖が相手を責めないとか、許すというだけでなく、いつも私たちの中にある、自分でも気づいていなかったような仏ごころを見つけだし、そこに光をあてて下さったからです。

庭野開祖の孫である庭野光祥次代会長は、ご家庭の中でのこんなエピソードを語っています。

「ある日のご供養の時、私は導師をされる開祖さまの読まれるペースでは家を出る時間に間に合わないと思い、申し訳ないと思いつつも、意識して読むペースを速めていきました。自然と声も大きくなりました。その超特急のご供養が終わると、開祖さまが満面の笑みを浮かべてこちらをふり返りました。そして、こうおっしゃったのです。

『いやあ、今日のご供養は勢いのある、いいお経だったよ』開祖さまに合わせなかったことを気まずく思っていた私は、嬉しくなりました。ペースを合わせなかったことを注意されずに済んだからではありません。

私が自分でも気づいていなかった、私の中の仏性を、開祖さまがまるで手品師のように思いもよらないところから、ポンと取り出して見せて下さったように思えたからです。

私たち孫がご供養のお役をした時は、『いい音だ。上手だったよ』と喜んで下さり、食事の時には『うちのご飯は世界一だ』と褒めて下さいました。ふれ合う人の良いところ、仏ごころだけをご覧になっている温かさが、いつも伝わってきました。

ですから、開祖さまといる時、私たちは何も構えることがなく、安心していられました。〈いつも開祖さまに喜んで頂ける私になりたい〉、そう思うと、心の中がギュッと熱くなりました」と語っています。

**相手が誰かれということなく、本当に法に導こうと思うと、人を敬う気持ちが大切です。人さまがみえたとき合掌で迎えるということは、その人を信じ、その人の本性に仏心がある、仏性があると考え、その人格を最高に尊敬することです、特に法華経では常不軽菩薩品に端的に〝ただ礼拝を行ず〟とあるように、見る人、見る人を礼拝するという行が、その人の菩提心を起こさせる因縁を生むことになるのです。**

**仏さまはすべての人を成仏させようとして出現されたわけで、私たちが仏教を信仰するのは、その仏さまの願いを素直に受け止めて、一人一人が仏に成るためなのですが、では、どうしたら仏さまと同じ境地になれるか、成仏するためには何が必要なのか、ということが問われてきます。**

# 庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

**《アジアの思い》**

京都市の北東、滋賀県と京都府にまたがる比叡山は、日本の天台宗の総本山である。延暦七年(七七八年)、伝教大師最澄が山中に堂を建てて一乗止観院と名づけ、その後、唐に渡って天台山で法華経を学んで帰朝したのち、桓武天皇の勅願のもとに天台法華宗をひらいた。

以来、御所の鬼門を守る王城鎮護の道場として、根本中堂を中心に三塔十六谷に三千の堂塔がいらかを連ねる聖地となった。千二百年の歴史を経た今も、全山をおおう千古の樹林は霊山の静寂をたたえている。昭和五十一年七月六日と七日の二日間にわたり、日本仏教の母山とも言えるこの比叡山延暦寺会館に、諸宗教の代表百人が集まった。

その年の十一月に迫ったアジア宗教者平和会議(ACRP)の事前研究会が開かれたのである。ベルギーのルーベンで開催された、先の第二回世界宗教者平和会議(WCRPⅡ)のさなかに、「アジアの宗教者だけの平和会議を開きたい」という要望が高まってきた。

会議のあいまのティータイムにアジアの宗教者同士の懇談会がもたれて、「世界の宗教者の会議となると簡単に開けないし、参加するのも容易ではない。アジアには世界の平和をおびやかす問題が山積している。アジアの宗教者だけの会議を開けないものか」といった要望が出てきたのであった。

「アジアの平和はアジアの宗教者の手でなくては築けない。日本が幹事役になってほしい。庭野先生に、是非お願いしたい」その場でほぼ話がまとまり、アジアの宗教者がいちばん集まりやすい場所として、シンガポールでそのための準備会がもたれた。

昭和五十年の七月、その準備懇談会に、シンガポール、インド、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、パキスタン、スリランカ、オーストラリア、ニュージーランド、そして日本の十一ヶ国から、二十五人の代表が集まった。

同じアジアの隣人同士という親近感があって、なごやかな雰囲気のうちに活発な意見が交わされ、会議のテーマを「平和への途上で・アジアは省察し、行動する」と決定し、開催地、日程、予算と会議の全容が決まっていった。

しかし、日本にとっての隣人であるアジア各国の人々の心の奥には、かつてのいまわしい戦争の傷跡が、消えることなく残っている。それを忘れてはならないのだった。この準備懇談会でシンガポールを訪れたとき、庭野開祖は知り合いの中国系シンガポール人医師夫妻に、こんな話を聞かされた。その時の言葉がいつまでも耳に残った。

**「私の妻の父は日本軍の機関銃で殺されました。その時、妻の母は二十八歳で、小さな子供を四人もかかえて、口に言えない苦労をしました。何度も死ぬことを考えたそうです。でも、子供がいるから死ねなかった。母は死にもの狂いで働きました。母は、これまで日本製のものは絶対に使いませんでした」**

シンガポールは太平洋戦争の最初の激戦地だった。いまは美しい町づくりが進んで、戦争の傷跡は見当たらないが、人々の心に刻まれた傷跡がどれほど深く、それを癒すのにどれだけの年月を要するか、庭野開祖は考えずにいられなかった。

**「日本の私たちが心からアジアの国々の立場に立って考えることができなくては、かつての傷跡の上に、さらに傷を重ねることになってしまう。アジア宗教者平和会議を本当に意義あるものにできるかどうかは、日本の宗教者が戦争責任を率直に懺悔できるかどうかにかかっている」庭野開祖は、そう心を決めていた。**

世界の平和を考えるとき、アジアが抱えている問題は極めて重要だ。当時、アジアの国々の大半は発展途上国で、しかも民衆の生活に宗教が深くかかわっている。ヨーロッパと南北アメリカがキリスト教世界であり、中東がイスラム世界であるのに対して、アジアは宗教のるつぼの観を呈している。

そのアジアの世界を二分する自由主義と社会主義の大波がかぶさり、常に世界の紛争の導火線になりかねない危うさを、アジアははらんでいた。日本は、そのアジア諸国と抜き差しならぬ関係で結ばれているのであった。

戦後の日本の豊かさへの羨望の裏側には、根強い反感がわだかまっていて、日本製品の東南アジア進出に対して「日本は経済にかたちを変えて、またしてもアジアへの侵略を始めている」と警戒心をいだく人も少なくなかった。　(つづく)

## 渉外部からのメッセージ

新聞之新聞社（東京都千代田区）主催の「社会部長が選ぶ今年の１０大ニュース」の選考会があり、１位「脱官僚・マニフェストで政権交代」、２位「裁判員制度スタート、市民が法廷に」、３位「足利事件、ＤＮＡ不一致で菅家さん釈放」となったそうです。驚いたことに１０位までのニュースには「バラバラ殺人事件」が入っていませんでした。毎日のように殺人が報道される中にあって日常化している自分が怖くなります。人が人を殺めることに慣れた社会は国同士の争いも慣れてしまうのでしょうか。それこそ重大ニュースです。

**この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266**